

ヨハネによる福音書 4章 16～30 節

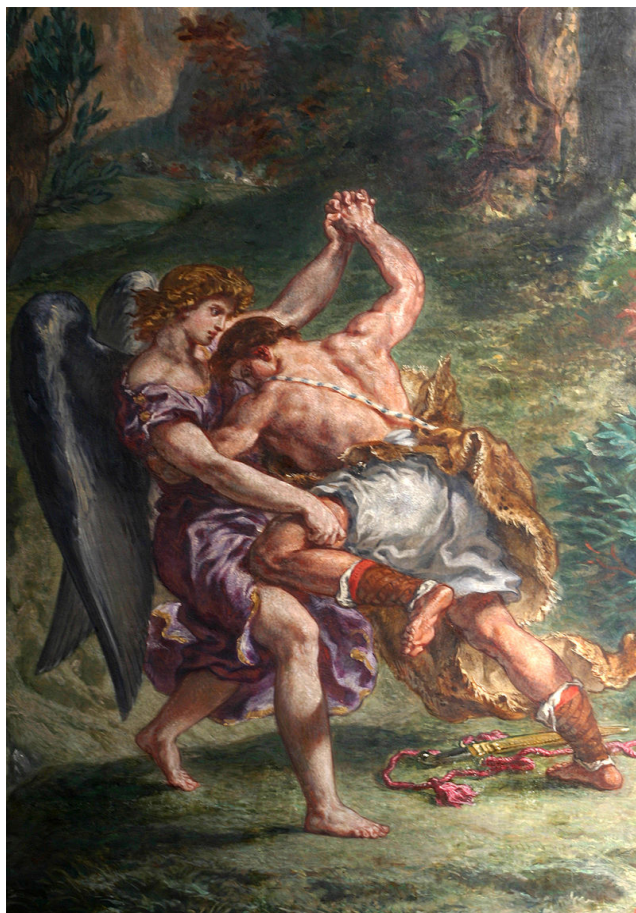
「旅路の果てに、恵みの神が・・・」



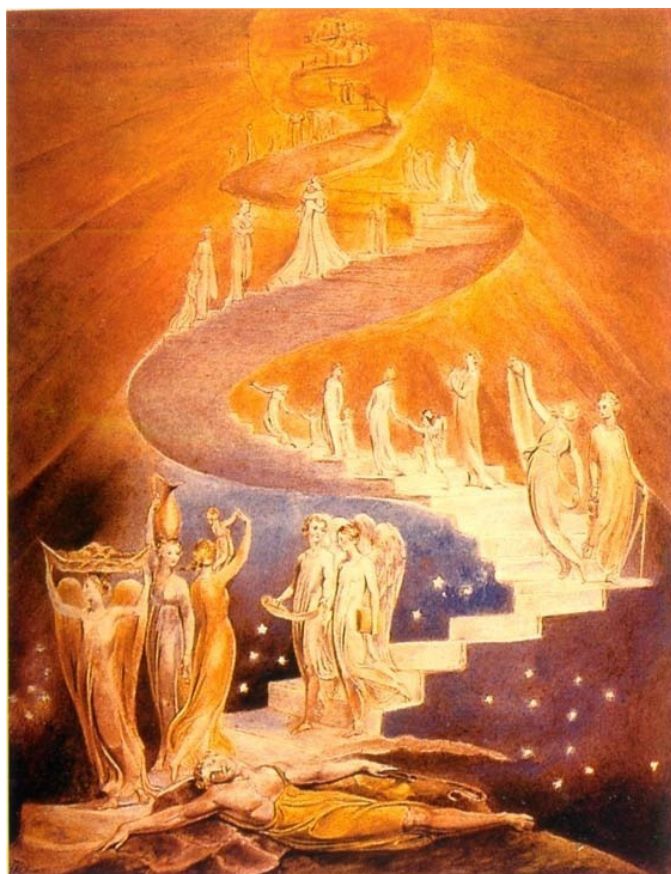
カラッチ 「キリストとサマリアの女」

さあ、見に来てください。
わたしが^{おこな}行ったことをすべて、言い当てた人がいます。
もしかしたら、この方がメシアかもしれません。
(サマリアの女性、28～29)

いいえ、祝福してくださるまでは離しません。
(ヤコブ、創世記 32:27)



ドラクロワ「天使とヤコブの闘い」



わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。・・・見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。
(創世記 28:13~15)

ウィリアム・ブレイク「ヤコブの階段」

角田 三郎

つのだ・さぶろう

1925～2012年

元・日本キリスト教団の牧師。

陸軍士官学校を卒業。

その後^ごうまれた長女に“いずみ”と名づけたのです。それは、私のように外的な泉の慰めを求めて旅する者ではなく、本当の命の泉・主イエスを心のうちに信〔じて〕受〔け入れ〕・・・慰めと命にみたされた者であってほしいというねがいからでした。

私自身にとって“いずみ”は、幼い日から父親になるまでこのように魂の奥底に触れてくるものでしたから、主イエスが命の泉について語られたことがとても慕わしく、本当に自分の存在の根源の所に主が語りかけ、また主がそこに命の泉としていますことを感謝せずにいられないのです。

お母さん、先生はどうして、私^{わたし}ん家^ちのこと知^ちってんのかなあ？

——説教を聞いた女の子がお母さんに

送り出せ、荒れた空に鐘打ち鳴らし。

行かせよ、年を。

迎え入れよ、新しきを。

鐘打ち鳴らして迎え入れよ、雄々しく自由なものを、大きく広き心、優しく温かき手を。

鐘打ち鳴らして迎え入れよ、真実のキリストを、真^{まこと}のキリストを。

——19世紀イギリスの桂冠詩人^{けいかん}、アルフレッド・テニソンの詩より